かたりべ144

豊島区立郷土資料館・芸術文化推進グループだより

写真1（上）　池袋駅東口周辺ジオラマ（昭和40年代前半想定）

写真2（左上）1963年の池袋駅東口（松井一彦氏撮影）

写真3（左下）人形目線で撮影した「池袋明治屋」・「一貫堂時計店」付近（池袋駅東口）

人形目線でジオラマを見る

現在開催中の特別展「豊島大博覧会」では、ジオラマ作家山本高樹氏制作のジオラマ三点を展示しています。写真1は、そのうちの一点、昭和四〇年代前半を想定した「池袋駅東口周辺ジオラマ」の全体像です。正面にある八階建ての建物は西武百貨店、本来ならばその右隣に東京丸物百貨店（現在のパルコ）が所在しますが、スペースの関係で省略されています。

山本氏からは、ご自身が制作したジオラマを見学する際には、ジオラマ内の人形目線で眺めるとリアルさが倍増するとのアドバイスを受けていました。そのため、今回のジオラマ展示では、見学者がそれほど屈みこまなくても覗けるように、三点とも通常より高い九〇センチメートルの高さの展示台を制作し、その上にジオラマを配置し展示しています。

写真2は一九六三年に西武百貨店の階上から撮影した池袋駅東口の様子です。当時池袋駅東口を走っていたトロリーバスや路面電車の都電の存在が目を惹きますが、写真右側に写る「明治キャラメル」、「池袋明治屋」、「一貫堂時計店」の看板等も魅力的な被写体となっています。横断歩道のデザインも現在とは異なりシンプルです。山本氏がこの写真が池袋駅東口周辺ジオラマ制作時に最も参考になったと振り返るように、この時期の池袋駅東口を語る際のエキスが込められた一枚です。

写真2の構図を踏まえて、人形目線で撮影したジオラマの明治屋付近（現在の池袋駅東口交番付近）が写真3です。ジオラマ全体を撮影した写真1と比較すると、リアルさが際立っていますね。先に掲げた看板類をはじめとする建物や乗り物も含め、ジオラマには彩色が施されていますが、これは山本氏による地道な検証によるものです。カラー写真が少ない時代のジオラマ制作の難しさがわかります。

（郷土　秋山伸一）

特別展文学コラム② としま文学クロニクル

区制九〇周年特別展の開催にあたり、文学・マンガ分野では、前回の一四三号から一四五号まで、各章の見所や展示資料についての解説を連載します。

今回は、第二章「豊島区の誕生と人々のくらし　としまくのはじまり」の「としま文学クロニクル」のコーナーから、区内に居住した作家をご紹介します。

豊島区は、一九二三（大正一二）年に発生した関東大震災を機に一気に都市化が進むまで、牧場や畑が広がる静かな農村地域でした。急速に発展していく都市部の騒音から逃れるように、多くの作家たちがこの地域へと移住してきます。探偵小説家・江戸川乱歩もそのひとりでした。

芝区車町の家は（中略）京浜国道と東海道線からすぐの場所にあったので、（中略）汽車と電車と自動車の騒音が、だんだん耐え難くなって来た。汽車はときたまだけれども、電車と自動車はひっきりなしに走っているので、殊に自動車のクラクションの音が、神経衰弱になるほど、身にこたえた。一年ほどは何とか辛抱したが、もう我慢ができなくなって、二月ばかり借家を物色したあとで、池袋三丁目の今の住居を見つけて、七月に引越しをした。

乱歩の池袋への引越しはよく知られているエピソードですが、実は乱歩が越してくる以前から、多くの作家がこの地域に居住していました。

たとえば、劇作家・詩人として知られる秋田雨雀は一九〇五（明治三八）年から四〇年近く、雑司が谷に居住しました。その四年後、詩人・三木露風も雑司が谷へ越してきます。二〇歳で出版した代表作『廃園』は、当時寄宿した「六合舎」の庭園から名付けたといいます。また、児童雑誌『びわの実学校』主宰の坪田譲治や、『銭形平次捕物控』で知られる野村胡堂も雑司が谷に暮らしました。

大正期に巣鴨に八年ほど居住した歌人の若山牧水は、当時の風景を次のように詠っています。

麦ばたの　垂り穂のうへに　かげ見えて
電車過ぎゆく池袋村

広大な麦畑の中、実った穂の上に影を落としながら電車が走ってゆく、のどかな農村風景が目に浮かぶようです。

先に取り上げた坪田だけでなく、豊島区には児童文学と関わりの深い人物も多く暮らしました。雑誌『赤い鳥』で知られる児童文学者の鈴木三重吉や、『赤い鳥』に多くの作品を掲載した小川未明は目白に住んでいました。三重吉はその後、南長崎に居を移します。

また、今からちょうど一〇〇年前の一九二三（大正一二）年には、三人の人物が越してきます。『一千一秒物語』『少年愛の美学』などの著作で知られる稲垣足穂は、西巣鴨に七年近く暮らしました。まだ駆け出しの作家であった足穂は、「池内ダンシングパビリオン」というダンスホールで、用心棒を務める代わりに寄宿させてもらっていたようです。西池袋には、柳原白蓮が宮崎龍介との新たな生活を始めるため、越してきました。一二月には、この年に雑誌『文藝春秋』を創刊した菊池寛が雑司が谷に越してきます。一九二六（大正一五）年に社屋を移転するまで、雑司が谷の自宅で雑誌の編集作業を行いました。

その後も『桃太郎侍』で知られる山手樹一郎が要町に、乱歩と並ぶ人気作家であった探偵小説家の大下宇陀児は、乱歩と時を同じくして池袋駅を挟んだ東側の雑司が谷に居を構えました。また、名画座として知られる「文芸坐」の前身「人世坐」を創設した小説家の三角寛、推理作家の泡坂妻夫、飛鳥高も続々と豊島区へと転居してきました。

今回の展示では、区に越してきた順に、著書を展示しています。区ゆかりの全ての作家の著書を展示することはできませんでしたが、それでもさまざまなジャンルの作家が集っていたことが分かります。詩歌や児童文学、時代小説に探偵小説など、棚に並んだ書籍の表紙から、地域の文化の歴史が見えてくるのではないでしょうか。

【引用】『江戸川乱歩全集第二八巻　探偵小説四十年（上）』光文社文庫、二〇一五年／若山牧水『さびしき樹木』南光書院、一九一八年

（文学・マンガ　佐伯百々子）

区制90周年特別展 豊島大博覧会「第2章 戦中・戦後の区民のくらし」展示紹介 前編

本稿では、現在開催中の区制九〇周年特別展「第二章 戦中・戦後の区民の暮らし」で展示している資料から抜粋してご紹介いたします。資料のほとんどは区民の皆様から寄贈いただきました。紙面の都合上、前後編に分けてお届けいたします。

戦時下のくらし

「戦時下のくらし」展示では、灯火管制用の電球や空襲時の対応をまとめた『防空絵とき』を展示しています。

こちらの展示でご紹介する資料は「隣組の湯飲み茶わん」です。側面には『隣組』（岡本一平作詞・飯田信夫作曲）の歌詞と絵が描かれています。

一九三七（昭和一二）年七月に始まった日中戦争を皮切りに、日本は国民への統制を強めていきます。隣組は国家総動員の下部組織として一九四〇（昭和一五）年九月、内務省により制度化されました。配給切符の割当や空襲時の消火活動だけでなく、住民の相互監視の役割も担っていました。隣組の活動を周知するため、同名の歌も誕生しています。その歌詞は「とんとんとんからりっと隣組～♪」から始まり、隣組によってどのような恩恵があるのかを説明しています。

終戦後に隣組は廃止されましたが、『隣組』の歌はその曲調の親しみやすさから、多くの替え歌が作られました。代表的なのは『ドリフの大爆笑』（一九七七～一九九八年放送）のテーマです。「ド、ド、ドリフの大爆笑～♪」のフレーズで思い出す方もいらっしゃるかもしれません。

また、広島の呉を舞台に戦時下の一人の女性を描いた長編アニメ作品『この世界の片隅に』（二〇一六年公開）では、原曲のカバーが劇中歌として流れました。

空襲があった日

一九四四（昭和一九）年八月、連合国軍によりグアム・サイパン島が占領されると、アメリカの戦略爆撃機B29の爆撃可能範囲がほぼ日本本土全域をカバーできるようになります。当初は軍需工場を狙った「精密爆撃」が主でしたが、日本の早期降伏を目的とし、東京などの大都市や地方の市街地への「無差別爆撃」が拡大していきました。

一九四五（昭和二〇）年四月一三日には、豊島区を含む東京北西部がB29による焼夷弾爆撃を受けました（城北大空襲）。豊島区では死者七七八名、全焼家屋三四，〇〇〇戸、被災者一六一，六六一名（当時の区人口の七割）もの甚大な被害をもたらしました。

「空襲があった日」の展示では、M69焼夷弾の筒や空襲による火災で溶けた日用品を展示しています。

こちらの展示でご紹介する資料は「伝単」です。伝単は敵国の兵士・民間人に対し、士気低下や投降を促す目的で作成されたビラのことで、上空から航空機などによって撒かれました。

伝単を拾った場合は憲兵や警察に届け出ることが義務付けられ、違反した者は罰則を課されました。戦時中、回収の対象だった伝単ですが、今日まで処分されずに残っていることは大変重要なことです。厳しい情報統制下にあった当時の人々は、空から降る伝単を見て何を感じたのでしょうか。

後編では「焼け跡からの出発」と「池袋ヤミ市」の展示についてご紹介いたします。※一四五号へ続く

（郷土　清水健太）

区制90周年
特別展紹介

豊島区を走る都電 1

豊島区制九〇周年特別展の開催にあたって、今号一四四号と次号一四五号の二回にわたって、第三章の「豊島区を走る都電」で展示している資料などを紹介していきます。

＊系統板いろいろ＊

都電の前面部には、系統表示板という数字が入った板が取り付けられています。系統とは都電の運行系統のことで、最盛期には四〇を超える系統がありました。系統板とひとことで言っても、形状や寸法、材質など、いくつか種類があります。特別展では、金属製とプラスチック製の二種類の系統板を展示しています。金属製の系統板は、大型で前面部の右側に固定されています。金属製の系統板の中でも、系統のみ表示されているものと系統の下に企業などの広告が入ったものの二種類あり、今回の特別展ではどちらも展示しています。広告が入った金属製の系統板は、写真にも残っているため、目にした方も多いのではないでしょうか。下部写真のように雑誌や百貨店、ミシン、酒造メーカーなど、様々な企業や団体が広告を出していました。金属製の系統板に続いて登場したのがプラスチック製の系統板です。こちらは系統表示と広告が別々となり、それぞれ入れ替えることができるようになりました。金属製の系統板と同じように、前面部右側に固定されましたが、前面部中央に固定できる車両もありました。この車両は系統板を固定する部分の裏側に電灯が仕込まれており、行燈のように系統板と広告を光らせて夜間でも確認できるようになっていました。

グリーン大通りを走る都電17系統　1967年撮影　松井一彦氏提供

都電が廃止された後、残された都電荒川線でも、予算的な面から平成に入るまで新型車両の導入が出来なかったため、都電各系統で使用していた車両を運用していました。そのため、系統板と同規格の荒川線と印字された表示板が用いられていました。

＊方向幕＊

方向幕は都電の行先を示すものです。現在のバスや電車では、電光掲示板のものがほとんどですが、当時は布製のものを機械で巻き取っていました。展示しているものは折りたたんでいますが、すべて広げると、一二三cmの長さがあります。

展示中の系統版(16系統、金属)
窪木庄作氏寄贈

展示中の系統版(16系統、樹脂)
窪木庄作氏寄贈

＊側面板＊

側面板は、都電の行先や停車する停留場を示すものです。名前の通り、車体の側面に取り付けます。現在では方向幕と同じように、電光掲示板に切り替わっていますが、当時は金属製の板に印字し、車両が走行する系統が変わるたびに付け替えていました。展示している二種類の一七系統側面板は、一九六八(昭和四三)年に一七系統の数寄屋橋～文京区役所前間が廃止となる前と後のものになります。

＊乗務員の持ち物＊

郷土資料館では、実際に使われていた、運転手や車掌の持ち物も所蔵しています。制服類の一部として今回は制帽と腕章を展示しています。どちらも交通局の職員であるということを示すものです。『電車乗務員心得』は、東京都交通局が乗務員向けに発行したものです。電車の運行に関する規則や緊急時の対応、接客のマナーや身だしなみについて記載されています。また、別の資料では、職員が案内用に個人で用意した終電の時刻表やタクシーの料金表を挟んでいるものもあります。

※一四五号へ続く

（郷土　水吉雄人）

怪虫〝大黒虫〟の正体を追う〈前編〉

江戸時代後期に刊行された『江戸名所図会』は、江戸市域とその近郊の名所を案内する地誌です。

そこでは高田總鎮守氷川神社（豊島区高田二丁目二-一八）について、「甚質朴にして古雅なり」と紹介し、さらに「此御手洗の川より夷子大黒砂と唱ふるものを産す。此砂ハ水中に住る虫の化する由、近江古繁先生の雲根志にいへり」との割中（注釈）をつけています。高田總鎮守氷川神社への参拝者が手や口を清める川の中からは「夷子大黒砂」と呼ばれるものが取れ、それは『雲根志』という書物によると虫がつくったものだというのです。一体どのような虫でしょうか。

『雲根志』は、石に関する博物誌です。この後編三集（一七七九年）「夷大黒砂」の項では、砂を集めてエビスや大黒や寿老人などに似た人形をつくる虫がいることを紹介しています。長さは七、八分（二㎝前後）で、本当のことかどうか分からないものの春は人形の中にいる虫が夏には蛍になるとし、ただしこの人形が虫の巣であることは疑いがないとしています。各所の小川で見られ、「南都神谷川」（奈良）では夷虫、京都賀茂川では岩虫、薩摩（鹿児島）ではヂイガセナカと呼ばれ、他にも生息地が挙げられています。

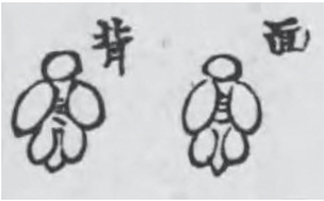

図1「氷川社御手洗大黒蟲の図」

蛍の幼虫は蛹になるとき土を集めて土繭をつくりますが、それは川岸に上がって土中で行なうので、蛍ではなさそうです。

区域周辺のことなら『新編若葉の梢』（一九五八年）をみてみましょう。江戸時代に雑司が谷の住人であった金子直徳が編集した地誌を底本とし、後年に海老澤了之介らが追補・修正を施したものです。

先の高田總鎮守氷川神社について触れている「氷川大明神」の項には虫に関する記述は見当たりませんが、上高田氷川神社（中野区上高田四丁目四二-一）の前に湧いている泉から、寛政一〇（一七九八）年九月に砂で固まった人形が多く出たといいます。人々はこれを大黒天の像だといって拾って帰りますが、よく見ると穴があって虫の巣であることが分かり、俗に「大黒虫」と呼ばれているものの本当の名は分からないとしています。『新編若葉の梢』はこの虫の詳細を、江戸近辺の紀行文である『嘉陵紀行』の文化一三（一八一六）年の記録から引用しています。

その内容は、図1を示しながら「此處ゟ細き尾の尖出龜の尾を出したるが如し」「頭巾ノ如ク袋ノ如ク槌ノ如ク米苞ノ如ク成モノ皆小石也、其胸ト背トモ云ベキ處ハ砂ノ凝結シタル也」「大黒天の形したるもの、頭巾の邊にて石に粘す」といい、砂や小石をまとっていてそこから細い亀の尾が出ているようだとしています。

生態については次のように説明されています。

水を去て久しければ、自ら石をはなれ落、内に在蟲死すれば成べし、其蟲の形如レ此、稍長すれば其窠を脱すと見ゆ、大なるは窠なし、大さ右の如くなるは、窠なくして水底に小石の間に潜り居る、形蟬に似たり、はね廻る事なし、捕へても動かず、死たるが如し

つまり、水から上げてしばらくすると石を離れ落ち、中の虫が死ねば図1となります。その虫の形は図2のようなもので、大きくなると図3のようになり、巣を持たずに水底の小石に潜っているといいます。形はセミに似ていますが、はねまわらず、捕まえても死んだように動かないということです。

図2

図3

続けて、この虫は夏に探しても捕まえられることは滅多になく、それは冬虫夏草（冬の間は昆虫に寄生し夏にその虫から生えるキノコ）の類であるから、寒い時期には多いが夏になればいなくなってしまうのだと考察されています。

大きくなると巣は持たず、長さ二寸（約六㎝）ほどにもなる虫で、「南郊廣尾の原」（渋谷区広尾）に流れる清水や、「野州桐生」（群馬県桐生市）にもいるといいます。

大きさや生態については史料により記述内容が異なりますが、この虫は水の底にいて、小石や砂を集めて営巣し、一時その巣の中で過ごすということは共通しているようです。　※一四五号へ続く

（郷土　鄧君龍）

図1～3：村尾正靖、『嘉陵紀行』（一九一六、『江戸叢書』巻の壱、江戸叢書刊行会所収）、国立国会図書館デジタルコレクションより転載

区制90周年特別展記念

美術見どころガイド2　誌上ギャラリートーク

前回、本誌一四三号では展示全体の見どころについてお話ししました。今回は一か所について、いわゆる深掘りというのをしてみようと思います。

第三章の映画のまちのコーナーには、戦後の美術作品が、豊島区内で繰り広げられた文化活動として広く知られる人世坐や文芸坐の資料とともに展示されています。この壁面の作品をどのように構成したと思われますか。ここでは、共通点がある作品を並べるようにしました。例えば、まるいもの、金属質のもの、得体のしれないもの、物体…。なんのこと？と思われるかもしれません。けれど存外、共通項を繋げてゆくことは、よく使われる展示手法です。

目線の高さには中村宏《島・B》①を展示しました。中村作品のまるみを帯びつつも堅い質感表現は金属を思わせる一方で、有機的な骨格と見ることもできます。一九五六（昭和三一）年に制作された《島》は、太平洋戦争末期の沖縄戦の悲劇を題材にしたものでした*。《島・B》も同系統の作品です。その右下には中村が銅で装丁した書籍『地を匍う飛行機と飛行する蒸気機関車　機械学宣言』②（稲垣足穂著、仮面社、一九七〇年）。ここには、表紙に浮き上がった曲線と金属質、そしてもちろん同じ作者という共通項があります。

《島・B》の上方にあるのは山下菊二《そこあさり》③（一九五五年）です。二作品ともに何が描かれているのかよくわからない、得体がしれない、という点でも共通するのですが、《そこあさり》については、制作年と描かれた水と思われる液体を考慮すると、一九五二年に日本共産党による山村工作隊（東京・奥多摩）に参加した山下が、着工された小河内ダムについて思うところを表現したのではないかととれます。戦争が終わって一〇年を経てもなお、思い描いていた戦後が訪れないことに対する作家たちの問いかけです。

それらの手前にある建畠覚造《CHIMNEY BOTTLES》④（一九七〇年）**をご覧ください。チムニーとは煙突の意。アルミニウムとステンレススチールからなる本作も、金属でまるみを帯びてもいます。最上段の井上長三郎《ビン》⑤も《CHIMNEY BOTTLES》もモチーフはモノです。中村装丁の書籍はそれそのものが物体です。何の関連もないように見えて、推理を広げてみると新たな発見があるはずです。

会場では時折、ホーホケキョと聞こえてきます。第二章で上映している入江比呂のアトリエ映像からです。《島・B》と《そこあさり》は彫刻家・入江の旧蔵品でした。もう失われてしまいましたが、アトリエの記録からは、庭のウグイスの鳴き声が今もあざやかに響きます。

（美術　小林未央子）

*山田諭「一九五〇年代『ルポルタージュ絵画』の展開」『中村宏　図画事件一九五三－二〇〇七』展カタログ、東京都現代美術館・名古屋市美術館、二〇〇七年。浜松市美術館蔵《島》への記述。

**映画「人間の証明」（一九七七年）には、この作品が映っているそうです。作品を展示したことで、このような情報もいただきます。

写真撮影：大谷一郎

編集後記

「かたりべ」一四四号をお届けします。

昨年末に特別展解説パンフレット（16頁カラー）を作成しました。見学者で希望する方に無料配布していますので、ぜひご覧ください。1月半ばから小学校3年生の郷土学習の見学が始まりました。今年度は小学校4年生を中心に観光バスによる見学ツアーの企画もあり、連日子どもたちで賑わっています。特別展が豊島区の歴史や文化を体感する機会となればうれしく思います。

（郷土　横山恵美）

かたりべ
No.144
・
2023年2月24日
・
豊島区立郷土資料館
・
東京都豊島区西池袋2-37-4
としま産業振興プラザ7階
・
電話 03-3980-2351
URL
http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/bunka/shiryokan/index.html

特別展「豊島大博覧会」会期延長のお知らせ

5月28日（日）まで開催中！

開館時間：午前9時～午後6時
休館日：月曜日、第3日曜日、3/21(火)、4/29(土)、5/9(火)、5/10(水)、5/11(木)

11月1日は としま文化の日

SDGs未来都市としま
SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
豊島区は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。